



NEWS LETTER かながわ

2012 年度第 2 号(通巻第 12 号)

2013 年 3 月 18 日 神奈川支部 発行

連絡先 e-mail: jacdp-kanagawa@hotmail.co.jp

巻 頭 言

副支部長 秦野 悦子

支部における会員相互の実践や活動の共有に向けて

毎年 3 月という月は、多くの人たちにとって終わりと始まりの季節です。東日本大震災以降は 3 月という月は、私たちが「家族」や「身近な日常」や「自分にとって大切なこと」と向き合い、あの災害が私たちの心に何をもたらしたのかを自問自答する特別な月になりました。神奈川支部会員の皆様は、この 3 月にどのような自分と向き合われたでしょうか。

神奈川支部では 2012 年度に新役員体制になって、やっと 1 年になろうとしています。これまでの役員が継続性という点で屋台骨を支え、新しい役員が、活性化という新風を吹き込んで支部活動の充実をめざしていますが、一年経って、まだその歩みは遅々としています。

神奈川支部は、比較的会員数の多い支部で、首都圏にあり、県内に 3 つの政令指定市があり、大学を初めとする研究機関でも、専門療育機関でも、各地区での福祉医療保育教育施設でも、会員が活躍しています。しかし、他支部と比較すると支部実施の研修会の回数は最下位であり、会員相互間の日常的実践研究交流を支部が主体となって活発に行っているとは言い難い現状です。

私もそうですが、片道 2 時間の遠距離通勤、本務で疲労困憊、各自の家庭事情、個人的知力や体力の制限など、できない言い訳はいくつでも上げることはできます。支部内で地域に密着した臨床発達心理士の実践や活動をもっと共有するような機会を持つには、支部として、どのような仕掛けを作ることが可能でしょうか。もう一步、会員が今より自身の活動枠を広げていくことで、何かが変わるでしょうか。2013 年度は、役員体制 2 年目にあたり、臨床発達心理士会神奈川支部がもっと活性化してく道を探りたいと思います。



神奈川支部研修会報告



テーマ：自閉症スペクトラム障害を理解し支援するために
ー脳科学・専門外来・デイケアの最前線ー

日 時：2013年2月23日（土）9：30～17：00

場 所：相模女子大学

講 師：加藤 進昌（昭和大学大学院保健医療学研究科教授・昭和大学附属烏山病院長）

金井 智恵子（相模女子大学子ども教育学科講師・昭和大学医学部兼任講師）

渡壁 典弘（当事者）

横井 英樹（昭和大学附属烏山病院 臨床心理士）

参加者：103名

<午前部>

自閉症スペクトラム障害の中でもアスペルガー症候群を中心に、大人の発達障害の臨床とデイケアを、約5年にわたって実践してきた昭和大学附属烏山病院での経験を学ぶことを目的として、自閉症スペクトラム支援の実像に迫る研修会を実施しました。臨床的な側面から出発して、脳科学を含めたサイエンスの知見を織り込みながら、子どもから大人のアスペルガー症候群において何がわかってきたか、今後の課題についてお話をいただきました。

1つ目の加藤先生の講演では、脳科学に基づくアスペルガー症候群に関する最新の研究知見について学ぶことができました。脳画像研究では、共感性の欠如によりアスペルガーの特異的な特徴が示されました。また大人のアスペルガーの臨床像についても、当事者の家族歴や臨床的特徴を踏まえて詳しく説明して頂きました。さらに現在注目されているアスペルガー症候群とADHDの違いについても深く考えさせられました。2つ目の金井の講演では、子どもから大人のアスペルガー症候群に対する生理学的指標を用いた視線計測の研究や、臨床評価についてお話をさせて頂きました。子どものころのアスペルガー症候群にみられる自閉的な特徴について具体例を交えながら説明しました。また大人のアスペルガー症候群については診断が非常に難しいため、いかに臨床評価が重要であるかについて報告しました。さらに幼少期のアスペルガー症候群の診断がある場合と診断がない場合では、診断がある子どもの方が、予後が良好であることをデータで示しました。その結果から、早期診断がいかに重要かということが分かります。早期発見という観点から生理学的指標を用いた乳幼児期の研究を紹介しました。

午前中の講演では、子どもから大人を含めたアスペルガー症候群の最新の臨床研究や臨床像について伝えることができたのではないかと思います。（文責 金井 智恵子）



加藤 進昌 氏

＜午後の部＞

午後の部は、3つのテーマで構成されました。1つ目は、講演「当事者によるお話」でした。講師は、自閉症スペクトラム障害の40代前半の男性です。学校時代は、IQが高いため、優等生としていじめの経験をすることなく育ったが、成人期以降は、対人関係が上手くいかず、就職と退職を繰り返したが、そのような時に病院で行われている発達障害のデイケアに参加し、ソーシャルスキルトレーニングを受けて対人関係を学んだこと、また自己認知が高まったことが、現在の仕事に大変役立っていることが話された。当事者の方から困り感をお聞きし、またソーシャルスキルトレーニングが自閉症スペクトラム障害の対人関係の習得に効果があることを知ることができ、大変有意義なご講演でした。

2つ目は、ワークショップ「成人の発達障害デイケアの実践から一具体的方法の成果と今後の課題」でした。最初に、昭和大学附属烏山病院で臨床心理士をされている横井英樹先生に「成人の発達障害デイケアの実践から」というテーマでご講演いただきました。昭和大学附属烏山病院においてデイケアとショートケアを開設した経過、そして、そこで行われている発達障害プログラムの説明がありました。プログラム参加希望者が多いこと、またプログラムが成果をあげているとのことでした。その後、横井氏がファシリテーターとし、同病院のソーシャルワーカーが補助するワークショップが行われました。ワークショップは、冒頭でお話しいただいた方に加え、附属烏山病院の発達障害プログラムに参加している自閉症スペクトラム障害の男性4名で行われました。CES（Communication Enhancement Session）の手法を使ったコミュニケーションプログラムが行われ、当事者の方々が積極的に自分の意見を話す状況を見学しました。実際のプログラム実施状況を見ることが出来て、大変勉強になりました。

3つ目は、全体討論である。当初司会をお願いしていた加藤進昌先生が急遽ご欠席となったため、横井先生が司会を務め、金井先生とワークショップにご参加いただいた5名の当事者の方々が全体討論に加わり、フロアーからの質問に応じていただきました。当事者の方々に対して、困り感や必要な支援についての質問がなされましたが、皆さんが大変誠実に答えて下さったのが印象的でした。

午後の部は、盛りだくさんの内容でした。何れも大変内容が充実したものとなり、終了後のアンケートでも、当事者のお話が大変良かったとの声が多数寄せられました。

（文責：尾崎 康子）

横井 英樹 氏



会場の様子



神奈川奈川県支部研修会についてのアンケート結果

(アンケート回収率：78%)

1. 午前の研修内容について

脳科学でアスペルガー症候群はどこまでわかるか（講師 加藤先生）
最新の研究と臨床評価に基づく子どもと大人の発達障害について（講師 金井先生）

①この研修内容は自分の知識の広がりにつながるものだった

とてもそう思う・そう思う(79名；98.8%) そう思わない(1名)

②この研修内容は臨床場面に役立つものだったと思った

とてもそう思う・そう思う(77名；96%) どちらでもない・無記入(3名)

③午前の研修内容へのご意見・ご感想

- ・ASDの脳科学からの研究やASDとADHDとの関係、「個性ではなく障害」である大人のASDが統合失調型パーソナリティ、社交不安、抑うつを伴う傾向が強いと今回学び、大変参考になった。診断は成人期パーソナリティ障害等との見分けも難しく、医療機関における最終診断は現時点において当人・保護者に慎重に伝える必要があり、その際の注意点について学べた。評価についてもとてもわかりやすかった。
- ・思春期前後で精神疾患が併発していると思われる状態で受診する患者を多く見ていて、診断の見極めの難しさを日々感じていたため、客観的な指標となる研究などとても興味深く聞くことができた。

2. 午後の研修について

当事者によるお話
ワークショップ「成人の発達障害ダイケアの実践から - 具体的方法の成果と今後の課題 -」

①この研修内容は自分の知識の広がりにつながるものだった

とてもそう思う・そう思う(69名；100%)

②この研修内容は臨床場面に役立つものだったと思った

とてもそう思う・そう思う(67名；97.1%) どちらでもない・無記入(2名)

③午後の研修内容へのご意見・ご感想

- ・当事者の話を生の声で聞け、ダイケアの具体的なCESの実践を実際に見ることができ大変有意義だった。
- ・当事者の意見討論から皆の人柄が感じられた。ユーモアを交え積極的に質問に答えていたのも素晴らしかった。

アンケート係より

全体を通して、会場のアクセスの良さや午前中は講義形式、午後は当事者の参加を含め具体的な実践と言った内容の構成に関して有意義だった等のご意見を多数いただきました。遠方からの参加された方や支部以外から参加された方も多数いらっしゃいました。
アンケートにもご協力頂きありがとうございました。

(文責：橋爪 美津子)

活動報告

このコーナーでは、神奈川支部会員の方に日ごろの臨床実践の活動報告をしていただきます。

今回も、前回からの連続連載でお願いしている震災支援として JDDNET 福島プロジェクトに参加された、横浜市総合リハビリテーションセンターの尾崎浩子先生からのご報告です。

JDDNET 福島プロジェクトに参加して

横浜市総合リハビリテーションセンター

尾崎 浩子

昨年度から始まった福島県委託事業「被災した障害児への相談及び相談・援助事業」専門家派遣は、今年度は「JDDネット災害支援プロジェクト福島プラン 2012」として継続しています。臨床発達心理士は、昨年度は毎月 5 日間の派遣でしたが、今年度は隔月 2 日間の派遣になりました。私は 7 月と 11 月の 2 回参加しました。

昨年度に続き、障害児放課後支援の場として開設された「ゆうゆうクラブ」が活動拠点となっています。昨年度はカルチャーセンターの一室を間借りして放課後の活動をしていましたが、今年度は代表者の自宅を保育ができるように改装されて、快適な空間に変わっていました。震災から時間がたって、相馬市、南相馬市近辺に児童デイ施設も開設されており、少しずつ支援を受けられる場所も広がってきていました。

昨年度同様に、障害学齢児の放課後支援のほかに、地域から依頼される仕事を引き受けます。ニーズは様々で、7 月は障害基礎年金の申請のための心理評価意見書作成、11 月は南相馬市の乳幼児健診への支援を行いました。

震災前は障害基礎年金を申請しないで生活しておられた方が、生活の変化に伴って新規に申請される事例があるようです。地域の精神科病院は閉鎖、縮小されたままのことも多く、心理評価を今までのように受けられなくなっている状態が続いています。

また、1 年ぶりに行った南相馬市の乳幼児健診は、1 歳半健診は 2011 年 3 月生まれ、震災の月に生まれた子供たちでした。30 人以上の方が健診を受けにこられ、この 1 年でたくさんの子供が南相馬市にもどってきていることがわかりました。詳しく書きませんが、大半の方が、震災前とは環境が変わった中で生活し子育てをせざるをえない状況であり、そうした影響をいろいろ感じました。

1 年前に比べ、人が戻ってきた街は活気を感じました。しかし原発に近く人が住んでいない場所は震災があったときのままの姿で残っていましたし、農作物がつくられていない雑草の生えた広大な田畑や、がれきが片付いて家の土台だけが残る広大な土地がすぐ近くにありました。

またこの時期になると新しい年度のことが気になります。震災から 2 年経過し、今後の支援の在り方を考えていく時期になります。皆様も、時々、臨床発達心理士会の HP で「ぴえろプロジェクト」の記事をご覧ください。

神奈川支部からのお知らせ

神奈川支部 2013 年度 総会および第 1 回研修会の予定

○日時：2013 年 4 月 20 日（土） 10：00～16：30 （1.5ポイント）

○会場：bono 相模大野

○テーマ：「発達障害のアセスメントの最新動向」

神尾 陽子（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所）

「発達支援の実践報告と意見交換」

網中 泉（横浜市福祉保健センター）

橋爪 美津子（県立相模原中央支援学校）

竹本 弥生（県立綾瀬西高等学校）

今年度の役員会



○第 1 回神奈川支部役員会 2012 年 5 月 26 日 17:00～18:00 横浜市青少年育成センター
役員体制変更による連絡・引き継ぎ、今年度の予定について

○第 2 回神奈川支部役員会 2012 年 9 月 1 日 13:00～15:00 横浜市青少年育成センター
第 8 回全国大会、研修会、ホームページ等について

○第 3 回神奈川支部役員会 2013 年 1 月 26 日 15:30～18:30 横浜市青少年育成センター
研修会、災害支援、ニーズレター、次年度方針等について

○第 4 回神奈川支部役員会 2013 年 3 月 2 日 16:00～18:30 横浜市青少年育成センター
今年度まとめ、次年度方針、災害支援、研修会等について